

漢語資料の用字に関する研究

詹, 瑋

<https://hdl.handle.net/2324/2348714>

出版情報 : Kyushu University, 2019, 博士 (芸術工学), 課程博士

バージョン :

権利関係 : Public access to the fulltext file is restricted for unavoidable reason (3)

氏 名 : 詹 璋

論 文 名 : 漢語資料の用字に関する研究

区 分 : 甲

論 文 内 容 の 要 旨

1372年（中国明代洪武5年）12月、明太祖朱元璋が冊封使を派遣し、琉漢交流の発端となった。1866年（清同治5年）最後の琉球国王尚泰まで、琉漢交渉は500年を超えている。琉漢交流史を記載する資料は主に二種類が存在している。一つ目は、琉球での官話教育のテキスト、いわゆる「琉球官話課本」のことである。また、当時の中国で留学生の語学教育や公文翻訳および通事養成のために編纂された辞典や琉球国を紹介する書籍もある。

国子監の移行や著者と記録者の方言を背景に、琉球に関する歴史的な資料には、閩語、呉語など多種類の言語特徴が入った。このような複雑な状況は、漢語及び外国語や異民族の言葉との接触には滅多にない特殊な存在である。

既存の研究によると、閩（現在の中国福建省）諸方言の影響が一番大きいと言える。その影響は以下の各段階で示す。

琉球の人たちが福建省からの渡来人に官話を習う（瀬戸口 1994）。



出使資料を記録させる際、発音者が琉球からの通事である（丁 2008）。



閩方言の影響を受けた官話で発音する可能性が高いと判断できる。



記録者が各自の母方言/官話の影響を受け、音価を書き入れた。

以上の三段階から見れば、閩方言の影響はすでに言語接触の最初の段階に現れ、他の官話や地域方言の影響はだいたい第三段階の対音レベルで現れる。この背景を踏まえ、本研究では、閩方言及び福建官話の音声体系を取り入れ、3巻の『使琉球録』及び『琉球館譯語』、『音韻字海』、『琉球入学見聞録』、『中山伝信録』合計七巻の出使資料を中心に調査を行い、寄語の音価を比較して用字の分析を試みた。

漢語資料は基本的に使用の場面によって、天文、地理、時令、花木、鳥獸、宮室、器用、

人物、人事、衣服、飲食、身體、珍寶、数目、通用など合計 15 項目に分類されている。本研究では、異なり語数を使用し、15 項目で合計 949 個の提示語が見られる。その中に、花木、鳥獸、数目といった 3 項目には『琉球入学見聞録』が欠如であり、残りの 12 項目に共通に出現した提示語を本研究の調査対象とする。既存の研究で、一つの官話あるいは方言の音声体系で寄語を解説したのは一般的な手段である。それに対し、本研究では官話、福建官話、福州語の順番でそれぞれ寄語の音価を表した。その上、作者の方言背景を取り入れ、通時的な変化も考慮して、一つ一つの音訳字で対応する形で基準音系の分類を行った。単字の分類は以下の 17 種類が見られた。官話、福建官話、福州語、官話/福建官話、官話/福建官話/福州語、閩方言（福州語を除外）、中古音、中原官話、江淮官話、西南官話、湘方言、吳方言（蘇州語）、広東語、客家語、音訳用字、南方系官話口語音、未確定用字。

また、異用字の理由が以下の三つがあるとまとめた。第一、寄語が対応する語源が異なっている。第二、提示語が同じ語源に対応するが、琉球語の通時的な音声・音韻変化によって用字を調整する。主に三母音化、摩擦音化を中心に、破擦音化、促音化、口蓋化も見られる。第三、提示語が同じ語源に対応し、通時的な音声・音韻変化が見られない時、異用字を選んだ字例も見られる。この場合は琉球語と中国語の音声体系の相違による異用字である。

用字を分類した上、用字法についても分類を行った。①音節合併、②音節折れ、③子音挿入、④唇音化、⑤融合、⑥音位転換、⑦二重母音と長音節との対応、⑧入声と促音節との対応、⑨モーラ数対応など合計九つの現象を発見した。

本研究は既存の研究に比べ、主に以下の三点において斬新さと意義を持っている。

まず、研究の方向性について、本研究では先行研究とは逆の方向を新たに取り入れ、語源から結果までという方向で各段階の寄語の音声分析を試みた。次に、既存の研究では、寄語が基づく漢字音の体系を研究する時、官話を前提として分析するのが一般的な方法である。その上で、基礎音系が不明の場合、中古音の音韻を基準に傾向を見出す。また、作者の方言体系で全体的に解説するのも一つ常套手段である。本研究では、複雑な音系混同状況に対して、体系的に音価を対応するより、「官話標準語 > 官話系 > 福州語/閩方言 > 作者の母語(官話/地域方言) > 中古音 > それ以外の官話/地域方言」という順番を新たに取り入れ、一つ一つの用字に音価を取り入れて分析し、その上でより詳しい用字及び用字法の分類を行うことができた。さらに、異用字の理由もあきらかになった。さらに、結論の部分では、閩方言や南方系官話口語音などの新しい用字分類が発見できた。また、用字法を新たに基準として、音節対応、モーラ数対応、音変化による本来語化の調整などの新しい分類を行った。